



ニューズレターくまもと

Vol.132  
2023.Spring

# NEWS LETTER KUMAMOTO

■ 発行:一般財団法人熊本市国際交流振興事業団 〒860-0806 熊本市中央区花畑町4番18号(熊本市国際交流会館)  
■ Publisher:Kumamoto International Foundation(KIF)TEL:096-359-2121 / FAX:096-359-5783  
e-mail:pj-info@kumamoto-if.or.jp URL:https://www.kumamoto-if.or.jp

## ★CONTENTS★

P1 多文化共生月間報告1  
P2 同報告2  
P3 同報告3  
P4 同報告4

P5 やさしい日本語で「学校のお知らせ」ハンドブック作成しました！  
P6 世界を知る～ポーランドの魅力紹介！～  
P7 同上(ポーランド郷土料理レシピ紹介)  
P8 ちょっと日本語、賛助会員募集

## 多文化共生シンポジウム～「外国にルーツを持つ子どもの教育」を終えて(報告)

前号(Vol.131 2023.Winterの2、3ページ目)で紹介しました表題の件につきまして、本紙にて報告を兼ねご紹介いたします。

熊本市の在留外国人数は2022年6月末時点で18,800人余りとなり、10年前の9,100人と比較すると2倍以上に増えています。更に2024年末には菊陽町に台湾セミコンダクターマニファクチャリング(TSMC)の操業も控えており、ますます外国人住民の増加が予想されます。そのような背景のもと、今回のシンポジウムでは、熊本でも増加している「外国にルーツを持つ子どもの教育」をテーマに開催しました。「外国ルーツの子ども」達は様々な理由で来日しますが、子どもたちは日本語習得や学校での学習だけでなく、親の在留資格や経済問題、家族関係や宗教など様々な課題を抱えていることが多く見受けられます。この子どもたちが安心して暮らし、学ぶためには教育現場だけでなく、地域全体で支えあう仕組づくりが求められています。今回はこれらの子どもたちが直面している課題や、置かれている環境への理解、配慮を考える機会として開催しました。当日は新型コロナウイルス感染症の影響があるにも関わらず多くのご来場をいただきました。

(開催日時) 令和5年2月19日(日) 14時00分～16時30分

(会場) 熊本市国際交流会館ホール

(参加人数) 87人



### 第1部 基調講演「外国にルーツを持つ子どもの教育」

～学校や地域がひとりひとりの可能性を膨らませるためには～

講師:金 光敏(キム クアンミン) 氏

大阪生まれ在日コリアン3世。社会教育士。多文化共生NPO法人役員、Minamiこども教室実行委員長を経て、現在は常磐会短期大学兼任講師/大阪樟蔭女子大学非常勤講師、外国人の子どもの教育支援、多文化共生のまちづくりのアドバイザーを務める。

単著「大阪ミナミの子どもたち～歓楽街で暮らす親と子を支える夜間教室の日々」(彩流社、2018)をはじめ、共著も多数。

講師の金氏自身も「外国ルーツの子ども」としての実体験を踏まえながら、現在の「外国ルーツの子ども」たちを取り巻く環境や制度の現状、これからの学校教育の在り方や民間団体との連携の可能性についてご講演いただきました。

以下、講演内容をご紹介します。

### 【“外国ルーツの子ども”であるということとは？】

私は長年、「在日コリアンの民族教育を制度的に保障する」取り組みを行ってきました。1990年代中頃を過ぎたあたりから、ニューカマー(1980年代以降に日本に長期滞在する外国人の意)と呼ばれる日系ブラジル人や中国帰国者の子ども

たちが置かれている教育環境が、かつて私が置かれていた環境と重なり、怒りを覚えました。私は幼少期、自身が朝鮮半島に繋がりがあること、朝鮮人であること、韓国人であることを呪いながら生きなければならないほど、その環境はひどいものであったからです。現実には、法律や制度に基づいて明確な線引きがされています。1947年5月2日、外国人登録令が公布されました。憲法は「国民」という主語で権利について明記していますが、外国人登録令により朝鮮人や台湾人たちは、「国民」というカテゴリーから除外されました。そのため、在留していたこれら旧植民地出身者はほぼ無権利状態に陥りました。私は日本で生まれ育ちましたが、ルーツによる国籍の違いから日本人の誰もが持つ普遍的な権利を私は持つことが出来ませんでした。現在、ニューカマーの子どもたち、あるいは日本で生まれた外国にルーツを持つ子どもたちが私と同じ経験をしているという現状は、私にとって放置できない問題だと思いました。困っている子どもを支援しよう、苦しんでいる子どもたちを手助けしなければならないというような感覚よりも、かつての自身と重なったことによる当事者としての立場から、積極的に「外国ルーツの子ども」たちの支援に関わってきました。

### 【外国籍子どもにとって義務教育とは「恩恵」ですか？】

外国人登録令により、私のような立場の子どもたちが日本の公立学校へ入学する際には誓約書を書かなければなりません。1965年当時の文部省が「外国籍の子どもたちが希望する場合は日本人同様、学校に通学することができる」という通達を出しましたが、そこには「但し、特別な配慮を要するものではない」という条文が付与されていました。「特別な配慮」とは、固有の言語教育、つまり私たちにとっては韓国語、朝鮮語など母語、



文化の事を指します。当時はいくつかの公立学校では母語や文化に関する学習の機会が設けられていましたが、この但し書きのため、その機会を与えてもらうことはなく、現在も外国籍の子どもは義務教育の対象になっていません。義務教育の対象になるということは大変重要です。ただ近年は、義務教育は「子どもの権利」という認識が広がり、例えば養護学校が義務化され、専門教員の配置や施設の整備が進みましたが、義務教育の対象でなかった時代は、そんなことはありませんでした。つまり、外国籍の子どもたちも義務教育の対象にならない限り、今後も「恩恵」であり続けるということです。「外国ルーツの子ども」たちも義務教育の対象にすることを真剣に検討する時期に来ていると思います。

### 【新たな流れ ニューカマーの子どもたち、不就学の問題】

1990年代中頃から、ニューカマーと言われる中国帰国者の子どもや日系ブラジル人、ペルー人などの家族たち22,000人ほどが順次、日本へ帰国、日本各地に移り住みました。これにより日本各地の公立学校では、突然日本語が分からない子どもたちが通学してくるという事態になり、子どもたちも、日本語が分からないまま入学させられるわけです。多くの学校は大混乱に陥ったことだと思いますが、子どもたちはもっと大変だったと思います。結果的に、全国に100を超える民営ブラジル人学校が開設されましたが、2009年のリーマンショックの影響により、この子どもたちの親の多くは職を失い、学費が払えずブラジル人学校を退学、不就学になる生徒が増加、ブラジル人学校の閉鎖も相次ぎました。日本の学校にも馴染めず、ブラジル人学校も閉鎖され、この子どもたちの不就学問題が更に深刻化し、ようやく日本も様々な整備を始めます。

2009年1月、文部科学省は定住外国人の子どもに対する緊急支援策をまとめ、「外国人の子どもの就学機会の確保を図る」という定住外国人子ども緊急支援プランが公表され、各自治体でも外国人の子ども達の就学を拒んではいけないということになりました。また、2005年、2006年、文部科学省が不就学児童に関する全国一斉調査を行いました。不就学とは不登校ではなく、どこの学校にも在籍していないということです。この調査では、完全に不就学状態の子どもたちは全体の1.1%という結果が出ましたが、把握出来ていないという回答が16%ありましたので全体の20%弱くらいの子もたちが、何処にいるのかさえも分からないという結果でした。これが日本人の子どもたちの場合だったら、地域社会は大騒ぎすると思いますが、日本語を話せない子どもたちは行き場を失って、公園などで過ごしていても、誰も声をかけないというような実態が数値から見てとれるようです。

## 【外国ルーツの子どもの教育の課題と母語保持教育の重要性】

「外国ルーツの子ども」たちの教育の課題は、母語や母国文化の重要性というのを理解されない中で学級指導が行われていた事だと思えます。「外国ルーツの子ども」たちが学校へ定着するためにも母語保持支援は重要だと思えます。当時はバイリンガルという観念はあまりなく、日本語を覚えるために家庭でも母語で話してはならないという考えが強かったようですが、今では第一言語となる母語を覚えた後、第二言語となる日本語を習得する方が習得も早いことが分かっており、アイデンティティ形成の観点からもその重要性や必要性が語られています。ある都市の事例ですが、学校で不祥事を起こす日系ブラジル人の子どもたちが多くいましたが、この子どもたちをなんとか学校へ定着させようと思って始めたのがポルトガル語の授業でした。最初は課外授業として始めましたが、この子どもたちの学校定着度がかなり上昇しました。大阪における民族学級の事例からも分かっています。大阪市立小中学校では、在日コリアンの子どもたちが週1回、2週間に1回、教育課程外で同じルーツを持つ先生から母語や母国文化、朝鮮半島に関わる学習支援を行う民族学級があります。この民族学習は、高校進学の実選択肢を増やすことや留学、学校教育の質の向上が図られるきっかけともなっています。

## 【未来がある子どもたちのためにできること】

2021年、中央教育審議会の答申では「異文化理解・母語母文化支援、幼児に対する支援」という言葉が出てきます。これからの多文化共生社会を目指す中で、教育と福祉・自治共生の地域連携強化、教育支援における進路保障が重要となります。「外国ルーツの子ども」たちへの継続的な日本語支援を図る社会連携も必要です。小・中学校における日本語指導は政策化が進んできましたが、今後は高校や国際交流協会、NPOなど民間団体と連携した取組みが不可欠となります。教科指導や日本語指導に多くの立場の方々に関わり、「外国ルーツの子ども」たちの最後のセーフティーネットとしての強化も求められています。



また、子ども達を支援する側の教育も重要です。現在の教員養成課程や社会福祉者養成課程の中に人権や人権教育、多文化共生の科目が無いことは問題だと思えます。人権を守るためには、理論と実践が必要で、理論がなければ人権は思いやりの問題・心の問題として歪曲されることとなります。大阪では外国籍のまま教員になっている人が180名を超えています。当事者が教壇に立つこと、教育を実施する側も「多文化」化を進めていくことも非常に重要であると思えます。今、関わっている子どもたちが多様な進路の1つとして教育や福祉の現場に進出する後押しをして、社会の構造や認識を変えていくということが求められていると思えます。

## 第2部～熊本市における外国ルーツの子どもの教育サポート事例紹介～

「熊本市教育委員会の取組」熊本市教育委員会指導課長 福田 衣都子氏

2022年度は入国制限の緩和に伴い、日本語指導を必要とする児童・生徒が大幅に増加しました。小学生42名、中学生20名の合計62名、学校数としては小学校22校、中学校13校に在籍しています。受け入れ態勢の整備と効果的な指導のために教育国際化推進連絡協議会を立ち上げ、日本語指導教員と日本語指導協力員の16名で運営しています。令和5年度は日本語指導の充実に向けて、現在センター校として、黒髪小学校と桜山中学校がありますが、センター校を黒髪小学校に統合し、新たに、北区に楠小学校、南区に城南小学校を拠点校として教員を配置します。

さらに日本語指導協力員の増員も検討しています。今後も子どもたちのより良い成長のためには、指導者側の研修、力量アップが欠かせないと考えています。教員本人の努力だけではなく、教育委員会として先生方がきちんと学び、それを子どもに生かせる研修等を考えていきたいと思えます。熊本市教育委員会では子どもたちの笑顔のために日本語指導の取組をいっそう充実させたいと考えています。将来子どもたちが、「熊本の学校で学んでよかった」と感じ、日本との懸け橋になってくれればと思っています。

## ●おるがったステーション「外国ルーツの子どもへの日本語・教科指導」

NPO 法人外国から来た子ども支援ネットくまもと代表 竹村 朋子 氏

毎週日曜日に国際交流会館で実施している「おるがったステーション」は、熊本弁の「おるがった＝私の」、「ステーション＝ここから飛び出していく・羽ばたく場所」として、最初に来た子どもがつけた名前です。専門学校で日本語教師をしていた時代に、日本語が分からず困っている子どもの支援を始めました。その支援とは、日本語が分からない子どももいますが、多くは学校の勉強(教科)を学びに来る子どもが多いのが現状です。広報は全くしていませんが、口コミが広がり、これまでに関わった子どもを数えたら 150 名を超えていました。サポーターが少なく、日々対応に追われていますが、今後は学校との連携を強化していきたいと考えています。現在一番問題になっていることは、ダブルリミテッド(母語も日本語も完全に習得出来ていない状態)で支援学級に入った子どもが多いことだと思います。母語も日本語も習得できていないのでトラブルが多いことも問題ですが、何よりも考えることを放棄している子どもが多いと感じます。しかし、これはある程度のケア(サポート)ができれば脱出することも不可能ではありません。6年生で支援学級に入れてもらっていた子どもは、教室で2年生レベルのドリルを行っていましたが、一緒に6年生の国語ドリルをすると、きちんと読めるようになり、理解もできるようになりました。考えることを積極的にやり始めると、顔つきもかわり、コミュニケーションもとれるようになります。言葉が足りないだけで、実はできるのです。しかし、そのような子どもたちをどうやって発見し支援していくかが、これからの課題になると思います。

## ●おるがったキッズ「外国ルーツの就学前児童への生活日本語指導」

熊本県立大学文学部准教授 秋葉多佳子 氏

外国にルーツを持つ年少者向けの教室活動として2022年5月から2023年1月まで主に第4日曜の午前10時から12時まで「おるがったキッズ」を実施しました。3歳児から小学2年生まで、毎回2人～9名の参加があり、来日直後で母語だけを使う子どももいれば、日本生まれ日本育ちで母語よりも日本語の方が得意だという子どももいました。活動は、幼稚園児と小学生とが別々の活動をする前半と、幼稚園児と小学生とが一緒に活動を行う後半に分けて実施しました。幼稚園児の前半の活動は、ゲームや紙芝居、絵本の読み聞かせ、手遊び歌を行い、小学生は本の読み聞かせや国語のワークシート、漢字、ひらがな学習などを行い後半は、工作を行いました。保護者には、熊本市外国人総合相談プラザで生活や学校などの相談を行い、後は子どもの活動の見学をしてもらいました。

工夫した点として、インプットとアウトプットの両面を意識した活動を計画し、日本語の習熟度に差がある子どもでも対応できるよう、タスクの調整を行った点があります。多言語対応の手遊び歌を活用したり、集中力が切れないよう身体じゃんけんなどをしたり、身体を動かす活動も効果的でした。月に1度という限られた回数での開催でありましたが、始めは読み聞かせに興味を示さなかった子どもが集中して読み聞かせを聞くようになり、落ち着きがなかった子どもが落ち着いて学習に取り組む様子を見せてくれるなど、回を重ねるごとに多くの変化や気づきを見せてくれました。今後の課題としては、子どもたちのニーズの把握、関係者間での情報共有、活動の回数などありますが、振り返りや学びを生かし、令和5年度は更なる充実を図りたいと考えています。

## 結び

今回のシンポジウムは、熊本でも増加している外国ルーツの子どもたちが直面している課題や彼らが置かれている環境への理解・配慮を考えるシンポジウムとして開催しました。基調講演者の金 光敏氏より外国ルーツの子ども達が抱える課題の歴史的背景をお話いただき、課題解決へ提案等をいただきました。また、熊本市で外国ルーツの子ども達へ支援・サポートを行っている熊本市教育委員会、NPO 法人外国から来た支援ネットくまもと、熊本県立大学より活動紹介をいただきました。教育現場、行政、NPO等民間団体、国際交流協会、地域が連携し、社会全体で外国ルーツの子ども達をサポートし、社会で活躍する人材として育てていく、サポート体制を構築していく為にも日頃から連携・協力できるネットワーク構築が必要と強く感じたシンポジウムでした。

## 『やさしい日本語で「学校のお知らせ」作成ハンドブック』を作成しました！

NPO 法人外国から来た子ども支援ネットくまもと  
竹村 朋子

「外国にルーツを持つ子ども」たちの支援をしていると、彼らの学校の鞆の中に数十枚のプリントがぐちゃぐちゃにまらめて突っ込まれているのをよく見ます。取り出して整理すると、学校の教科の宿題や教材のプリントの中に学校からのお知らせがたくさん入っています。子どもたちは自分にとってどれが大切なお知らせか、理解できません。外国人の親も同様で日本語がわからないので読めないし、読めても文化の違いで理解できなかつたりします。それで、彼らのほとんどは学校からのお知らせは親には見せないと言います。また、親の署名が必要な場合も生徒自身が署名をして提出していることもあるようです。プリントを提出せずに先生から叱られたり、内容が分からず行事の時一人だけ他の子と違う服を来て登校するなど恥ずかしい思いをする子もいます。本人だけでなく保護者もお知らせが理解できないと困ります。例えば、安心安全メールの登録方法や実際に送られてくるメールなど、漢字が分からない保護者には全く理解できません。かといって配っているお知らせの漢字にルビをつけても使われている言葉がむずかしいので保護者には理解できません。フィリピンのような非漢字圏出身の保護者にとって漢字熟語はとても難しいものです。一番困るのはお金が必要な場合です。仕方なく親に見せますが、母語で説明しても親の国の学校と制

度が違うため、理解してもらえないこともあるようです。国によっては学校の行事が日本とは全く違う場合もあります。

このような困り感を抱えた子どもたちの声に応えて、今回『やさしい日本語で「学校のお知らせ」作成ハンドブック』を作成しました。お知らせの中で特に保護者の方に理解してもらいたいものを選び、やさしい日本語に書き換えしました。できるだけ簡単な言葉を使い、短い文で、外国人にもわかりやすい日本語にしています。それぞれの学校で、必要事項を書き入れたり、翻訳機で母語に翻訳したりできるようにワード版もあります。

日本の学校行事を理解してもらうために行事の説明(用語集)も6か国語で作っています。子どもの編入時に保護者に渡すことで、保護者が戸惑ったり困ったりすることも少なくなると思います。日本生まれの子どもでも日本語が問題ない場合でも、日本語が話せない保護者と十分にコミュニケーションが取れないこともあります。子どもたちが安心して学校生活が送れるように保護者の方も含めた支援が必要です。ぜひ、この『やさしい日本語で「学校のお知らせ」作成ハンドブック』を活用していただき、外国から来た子どもたちや保護者が日本での学校生活を少しでも安心して過ごせるようになれば願っています。

※このハンドブックは、一般財団法人自治体国際化協会の助成を受けて作成しました。



やさしい日本語で「学校のお知らせ」  
作成ハンドブック QR コード





## 世界を知る

本項では「世界を知る」をテーマに JICA(独立行政法人国際協力機構) デスク熊本や、国際交流・国際協力分野で活躍している方、海外で生活している方々の協力を得て、日本で生活する私たちが日ごろ知ることが出来ない世界の興味深い状況をご紹介します

「ポーランドの魅力を紹介します！」

熊本市国際交流振興事業団スタッフ マグダレナ ムジゴトさん

恐らく多くの日本人が訪れたことがない国の一つにポーランド共和国があると思います。ポーランドと言うと、何を連想しますか？5年毎に首都ワルシャワで催されるショパンコンクールやアウシュヴィッツ強制収容所、最初に世界遺産リストに登録されたヴィエリチカ岩塩坑など、ポーランドには面白いイベントや観光名所など魅力がたくさんありますよ！

私はポーランド南部シレジア地方の町で生まれ育ちましたが、2012年から2022年6月末までの約10年間、ポーランドの古都クラクフにある大学に通うため、この街に住んでいました。ワルシャワには多くの有名な観光スポットがありますが、留学生と観光客で賑やかなクラクフの方が私は大好きです。まるで日本の京都みたいな街です。今回は皆さまに私のクラクフでの思い出や観光名所をお伝えしたいと思います。

クラクフは、ワルシャワに次いで二番目に人口が多い大都市でもとても歴史や文化に溢れている街ですが、17世紀、ワルシャワに遷都するまでポーランド王国の首都だったということをご存じでしょうか？また、第二次世界大戦では奇跡的に被害を免れたため、美しい街並みやヴァヴェル城、カジミエシュというユダヤ人地区が今も残っています。1978年、クラクフ旧市街地が最初の世界遺産リストに登録されました。



ヤギエロン大学

また、ヤギエロン大学という1364年に設立されたポーランド最古の大学もクラクフにあり、私はこの大学の日本中国学部、日本語学科に在籍していました。大昔の15世紀頃、地動説を唱えた天文学者コペルニクスもこの大学出身でしたので、何と私の大先輩になります！

せっかくなので、ポーランドの大学について少し紹介させていただきます。ポーランドの国立大学は授業料が無料で学士課程は3年間、修士課程は2年間です。高校3年生になるとMaturaという試験(日本でいう共通テスト)を受けます。入学したい大学と専攻したい学部によって試験の内容は異なります。例えば私が今から10年前にヤギエロン大学の日本語学科を受験した時は、英語と国語の試験があり当時は競争が激しかったですが、幸いにも第一志望のヤギエロン大学に合格することができました。



ヴァヴェル城

また、熊本と同じように、クラクフには綺麗で大きなヴァヴェル城というお城があります。学生時代はクラクフのカジミエシュというユダヤ人地区にあるお城から10分ほど離れていたアパートに住んでいて、付近にはポーランドで一番長いヴィスワ川がありましたので、よくこの川に沿って散歩をしていました。ちなみに、ヴァヴェル城が建つ丘の麓には洞窟があります。そして、この洞窟はある伝説がありますが聞いたことはありますか？

「ヴァヴェルの竜」という昔、大騒ぎを起こしたと言われるドラゴンの像もこの洞窟の前に建っています。伝説によると昔々、この大きなドラゴンがヴァヴェル丘の洞窟に住み着き、人間や家畜を捕食するので人々を恐怖に陥れていました。特にドラゴンの好きな獲物は処女の乙女でした。多くの勇敢な人たちがドラゴンに戦いを挑みましたが、みな敗れて食べられてしまいました。しかし、ドラテフカという勤勉な靴屋が、シープスキンに硫黄を詰めて、まるで羊に見えるように縫い合わせて、洞窟の前に置きました。

その羊を飲み込んだドラゴンは、自分の体内が燃えるのを感じて、近くを流れているヴィスワ川の水を飲み始めました。しかし、熱さが消えないので水を飲み続けた結果、ついにお腹が破裂して死んでしまいました。一件落着、ようやく人々に平和が訪れ、その勤勉な靴屋は王様の娘と結婚しましたとさ…。



聖マリア聖堂

最後に、クラクフのシンボルともいえるヘイナウ・マリアツキというトランペットの時報を紹介します。現在でも毎時間、街で一番有名な聖マリア聖堂の塔上からトランペットが時報を知らせます。しかし、いつも途中で演奏が終わります。このヘイナウ・マリアツキの由来を知らない観光客たちは、なぜ演奏が中断されてしまうのか不思議ではないかと思いますが、これには理由があります。時は中世に遡りますが、当時はこの聖堂の塔上にラッパ兵が配置され、火事や外敵などを見張っていました。また、この兵は町のゲートを開閉する朝夕時もラッパで知らせることになっていました。では、どうしてラッパの演奏が途中で途切れてしまうのでしょうか？それは1241年のこと、いつものように塔上で見張っていたラッパ兵がモンゴル軍の襲来に気づいたためラッパで異変を知らせようとしている途中で、モンゴル兵によって喉を射抜かれ命を落としたという悲しい言い伝えに由来しているためです。

ここまで私が大好きなクラクフを紹介しましたが、皆さまにポーランドの魅力が伝わったら嬉しいです！是非、一度はポーランドを訪れ、綺麗な街並みとポーランド人のおもてなしのこころを経験していただきたいと思います！最後に今回は料理の話は出ませんでした、代わりに皆さまの口にあうようなポーランドの郷土料理を紹介します。是非ご家庭で試してみてください！！

## ～ ポーランドの郷土料理「ピエロギ」～

ポーランドの家庭料理「ピエロギ」は、餃子のように好きな時に気軽に食べる料理です。



材料(2人前)

≪皮≫ 強力粉100g/塩少々/卵(M)1個/水 20ml/強力粉(打ち粉)適量

≪具材≫ ジャガイモ 2 個程度/カッターチーズ 50g

(A) 塩コショウ小さじ 1/2 / 砂糖小さじ 1/4

≪タレ≫ (B) タマネギ 50g 1/4 程度 / ニンニク・パセリ・オリーブオイル少々

始めに皮づくりから。ボールに強力粉、塩を入れ混ぜ合わせ、その後、卵、水を入れしっかりと混ぜ合わせてひと固まりにし、打ち粉をして表面が滑らかになるまでこねたらラップで包み常温で 30 分程寝かせる。次に、ジャガイモの皮をむき適当な大きさに切り、ポイルまたは電子レンジなどで火を通しマッシュポテトのようにしカッターチーズを混ぜあわせておく。次に寝かせておいた生地を台に打ち粉をして麺棒で 3mm ほどの厚さに伸ばし、適当な大きさに切り分ける(市販の餃子の皮で代用しても可。大きめの皮が良い)。それに具材を乗せ餃子の要領で口を閉じる。タレはフライパンを熱し、オリーブオイルを入れ、タマネギ、にんにくを火が通るまで炒め、その後、パセリを入れ全体を混ぜ合わせたら火を止める。後はお好みで、お湯で 5 分ほど茹で「水ピエロギ」にするか、フライパンで両面に焼き色が付くまで焼き上げる「焼きピエロギ」にし、最後にタレを掛けお召し上がりください！

日本語教師の採用

NPO 法人日本語サポートあさ  
小川ひろみ

日本語の教室もコロナ禍前の状態に戻りつつある中、教師採用が慌ただしくなっています。日本語教師の採用試験は一般職種同様の書類選考と面接に加え、実際のテキストの項目について模擬授業が課されることが珍しくはありません。そして現場担当の採用者は経験ある日本語教師かどうかを模擬授業5分で判断可能といっても過言ではありません。

「やさしい日本語」が海外からの旅行者とのコミュニケーションツールとしても周知されているのはご存じのとおりですが、日本語教師にとってこれは必須のスキルともいえるべきでしょう。経験の浅い先生は、とても丁寧に礼儀正しく、敬語を使い、ゆっくりと時折英語の単語も交えながら授業されることがあります。「やさしい日本語」の原則はまず、普通のスピードで話すことに加え、①短く ②カタカナ語(外国語・擬音語擬態語)要注意 ③具体的に ④否定文は避ける。これだけです。

例えば、授業スタートは今週ではありませんから、今日の授業はこちらの資料をご覧ください。

「やさしい日本語」使用の教室日本語では、勉強は〇月×日からです。今日の勉強はこの紙です。

「やさしい日本語」は味気なく乱暴にも聞こえるでしょうが、使いこなしは慣れです。

まずは、この必須スキルが日本語教師の第一歩かもしれません。

☆☆ 2023 年度 賛助会員募集！ ☆☆

事業団では賛助会員を募集しています。私どもの活動にご理解とご支援をいただくとともに、更なる国際交流や国際協力の輪が広がることを願っています。会員の方々には事業団の機関紙「ニュースターくまもと」の送付や様々な情報の提供をさせていただきます。ご協力いただける方はお手数ですが下記連絡先までお問合せいただきますようお願い申し上げます。

《個人会員》 一口 2,000 円 《団体会員》 一口 10,000 円

私たちは熊本市の国際交流活動を応援しています。ここでは団体会員のみご紹介いたします(敬称略) 令和 5 年 5 月 15 日時点

熊本労災病院／学校法人君が淵学園崇城大学／社会福祉法人恩賜財団済生会熊本病院／熊本保健科学大学

独立行政法人国立病院機構熊本医療センター

◇◇事業団 SNS のご紹介◇◇

事業団 SNS のご紹介 ～事業団が使っている SNS をご紹介します！是非アクセスしてみてくださいネ！～

Instagram		Facebook			Twitter	Youtube	相談プラザ
							
メイン	外国人向け	メイン	外国人向け	相談プラザ			



《お問合せ・連絡先》

一般財団法人熊本市国際交流振興事業団

熊本市中央区花畑町 4 番 18 号(熊本市国際交流会館)

(休館日)第 2・第 4 月曜日、年末年始(12 月 29 日～1 月 3 日)

(TEL)096-359-2121 (FAX)096-359-5783

E-Mail: pj-info@kumamoto-if.or.jp

URL: https://www.kumamoto-if.or.jp